

## パネルディスカッション

・パネリスト

原島 博・馬場 悠男・長谷川 真理子・石黒 浩

・コーディネーター

頼近 美津子



44

頼近 それではこれよりパネルディスカッションとさせていただきます。原島先生、まず全体的なお話で、先生方の講演を聴かれていかがでしょうか。

原島 一つ僕から聞きたいことがあります。今日の話とも関係ありませんが、もし進化した宇宙人がUFOに乗って地球に来たら、それは人間と似ているだろうか、それともタコに似ているのだろうか。

今日の馬場先生のお話は、どちらかというわれわれは好きでこういう顔になったのではなくて、ある意味では必然だということですね。そうすると宇宙人も勝手にそれぞれが好きで顔をつくるわけではなくて、たぶん何らかの必然に基づいて顔ができていでしょう。もし宇宙人が地球に来たら、それはどういう顔だと予想されますか。

馬場 やはり原則としてはわれわれに似ていると思います。というのは、それこそ香原先生が、「はじめに口ありき」とおっしゃったように、口の存在から顔が始まるだろうということですね。そして、生物は何らかの形で体を支える必要がありますが、いきなり固体の上よりも液体の中のほうが支えやすいですね。体表を通しての化学作用もうまくいきます。ですから液体の中で生物が誕生し、生物が一定方向に動いて、前のほうからエサがやってくるのを口で食べるとすると、その口のところに感覚器があるという基本構造ができていくわけですね。

そういうことは、地球という環境でなくても、どこかで生命が生まれて、それが運動性を持つ、さらに感覚を持つようになって中枢神経が

発達し、全体の構造ができあがっていくときには、やはり物理的な必然性がある、同じような構造をとると思います。ですから細かいところは違うかもしれませんが、今言ったような基本的な構造は当然できると思います。

それから、最終的に陸に上がったら、たとえば地面にあるエサを食べようとするときに、鼻が口より下にあつたら邪魔ですから鼻は当然上に来るだろうとか、感覚器は左右両方にあつたほうが、刺激の方向を探るのに都合がいいとか、そういう物理的な制約を考えると、たぶん似たようなものになるのではないかと。また体を支えるための骨格などの機能という意味でも、似たようなものができるのではないかとと思いますが、いかがでしょうか。

原島 宇宙人もたぶん似ているだろう。そう考えるとロボットもやはり動いてコミュニケーションするという意味では、別に人とコミュニケーションするから人に似ていなければいけないということではなくて、人と似ているというのはそれなりの合理性があると考えたほうがいいのでしょうか。

石黒 完全に似る必要はないと思います。人に似たアンドロイドを作っている理由は僕らは研究としてどこまで人に似せなければいけないのか、その要素を取り出したいからです。要素さえわかれば、最後はアンドロイドではなく、もっと単純なロボットの開発に進むでしょうが、そこに進む理由が今まで何もなかったわけです。研究者としてはそういうふうには思っています。

ただ、最後の自分のコピーを作るという話では、少なくとも私だということが、自分も含めて周りが認識できるだけのものにしておかなければいけない。でも一旦認識してしまえば、あとは難しくないという感じですか。

原島 僕は石黒先生のアンドロイドを前に見たことがありますが、頼近さん、今日初めて見て、いろいろご感想があるのではありませんか？

頼近 初めてアナウンサーになって画面に出てしゃべって動いている自分を見たときの衝撃が、たぶん石黒先生があのアンドロイドをご覧

になられたときの衝撃と同じではないかと思っています。

石黒 テレビの画面は二次元ですが、アンドロイドは三次元で、しかも触れて、どこからでも見えます。もしご自分のアンドロイドを作られたらもっとショックを受けられると思いますよ。

頼近 二次元で見ても自分のこと



を知らないという、人間の日ごろの状況に驚きますよね。

石黒　ですから僕らがどうしてアイデンティティを社会の中で保てるのか、不思議になりますよね。自分の認識と、他人が見ている自分の認識はかなり違うわけです。でも逆に言うと、ある程度顔がみんなに認識されていれば、その中で話しをする時に、細かい動作はあまり重要ではない気さえしてしまう、非常におもしろい経験だと思います。

馬場　今の話を聞いて思ったのは、そもそもジェミノイドという言葉、ジーン-遺伝子-という意味ではないんですね？

石黒　ツインズという意味です。

馬場　双子のジェミニですか。そうすると、それと同じ感覚を持ったのは、自分の子どもを見たときです。言ってみれば遺伝子を半分共有しているわけですね。さっき鏡だと逃げられるがジェミノイドだと逃げられないとおっしゃいましたが、子どもからは絶対に逃げられません。子どもは、ある意味では鏡で自分を見ている気がして、もう恐ろしい感じがするわけです。なにか同じだと思いました。

原島　やはり石黒先生は強いなあと思いますね。僕だったら前にずっと鏡が置いてあったら生きていけないのではないかと。人が生きていられるのは、自分の顔が見えないからだと思います。

石黒　wakamaruを作っている技術者の一人は双子の研究者なんです。二人とも私の大学の卒業生なのでよく知っているのですが、まったく瓜二つです。生まれたときから常に目の前に自分がいる感覚なのに、なぜそれでも平気かということ、意外に自分の動作はわかっていないから、動作を見たときに自分だとは思わないのです。顔は同じでも、動作はずいぶん違和感があるので、お互いに自分そっくりだと意識せずですんでいるのです。

原島　自分に似ていないところがあるから安心するんですね。

石黒　自分自身をわかっていないから受け容れられてしまう。人間の脳の中で思っている自分そのまま目の前に現れたら、それは本当にショックだと思います。私達はたぶん鏡の前ではいちばんいい顔しかつくりませんよね。朝、鏡の前でイヤな顔をつくって、「今日はこれでOK」という人はいないと思います。自分に対しては、かなり美化していたり想像が入っています。それが現実とずいぶん違うので、バランスが取れているような気がします。

原島　僕がもし自分のロボットを作るとしたら、生きている間よりも、お葬式のときに自分のロボットを置いておきたいですね。僕はいないからコミュニケーションできないので、せっかくお通夜とお葬式にわざわざ服も着替えて参列下さる人に感謝するのに、この形をして皆さんと握手すれば、ちゃんとした気持ちが伝えられていいと思います。

石黒 先生のおっしゃられた話は冗談ではなくて、大まじめに蘇りビジネスをやろうという人もいます。たとえばある映画会社が、亡くなった映画スターをアンドロイドで蘇らせたいというのは、まじめな話としてあります。

頼近 今のところおいくらでできるのですか。

石黒 車1台特注するのと同じです。量産しないと車でも、1億円くらいかかります。1億とは言わないですが、私そっくりのアンドロイドの体で、頭だけ挿げ替えるのでよければ、3000万円位です。

頼近 ただ、石膏の中に半日ぐらい入っていないといけないわけですね。

石黒 いや、30分ですね。

頼近 あれがけっこう苦しそうでした。

石黒 他のアンドロイドを作ったときは、みんな苦しがるからどうしてかなと思いましたが、自分でやって初めて石膏で型をとる事がどれほど苦しいかわかりましたね。

頼近 長谷川先生、動物は雄のほうが、いろいろシンボルとしても変わったものが出てましたが、人間の場合は女性のほうが着飾りますよね。

長谷川 女性のほうが着飾るといのは、そう見えているだけ、また最近の社会がそういうのが目立つというだけです。狩猟採集民、農耕民、昔の社会といろいろ見ると、人間社会一般に男もとても飾りますので、両方だと思えます。哺乳類一般には、雄同士は戦って勝ち残らないといけない、雌はどれか選ばばいいという関係なので、雄・雄の競争のほうが雌・雌の競争より激しいけれど、人間は雄も雌を選ぶし、雌も雄を選ぶし、両方向性の選択が強く働きます。これは一般的に哺乳類のゴリラなどとはすごく違うと思えます。

それから飾るという意味を造形的や化粧に限定してしまえば、女性の飾りのほうが多く見えたりするけれど、アピールする、自己顕示する、シグナルとして何かを発する、存在感を出す等、様々な視点から見ると、男性もすごくいろいろなことをやっています。

特に化粧、飾り、装飾に限ってみても、たとえば武士の刀の鐔、きれいな着物、狩猟採集民の人たちが体に塗るボディペインティング、牧畜文化の人たちが男性性を強調する彫り物を体にする、農耕文化の男性もいろいろします。そういうものを全部入れると、男性だってとても飾ります。地味な色の背広が一般化したことで、女性のほうが飾るといふ錯覚に陥っているだけだと思います。

頼近 馬場先生、魅力的な男性と魅力的な女性、男性はどういう女

性に惹かれ、女性はどのような男性に惹かれるか、馬場先生のお立場からご説明をいただきたいのですが。

馬場 いや、むしろ長谷川先生の領域ではないかと思います。よく言う話ですが、繁殖戦略として女性は、大事な子どもを大量のコストをかけて少しだけつくる。男性は、極端なことを言えば自分のDNAをたくさん女性のばら撒いて、当たるも八卦ではないけれども、どれかうまくいけばいいという戦略が当然あるわけですよ。

ですから男性のほうは女性をぱっと見て、いわばかなり見かけで判断して、自分の遺伝子をできるだけうまく育ててくれそうな人を短期間で峻別するわけですね。女性のほうは、将来に向かっていいDNAをもらわないといけないから、男性の見かけだけではなく、働きがいいか、あるいは行動は善良かどうかを見て判断する、そういう要素が強いのではないかと思います。もちろん両方あると思いますけれども、これは僕の素人判断です。

頼近 すごく乱暴に申し上げると、馬場先生のご意見だと男性にはぱっと見た見かけの方が大事で、瞬時で判断する動物だということですか。

馬場 男というのは下世話に言うと、自分のDNAをあげるという大変ですが、無理やりお願いして自分のコピーをつくってもらうのに適当であるかどうか、割と女性の物質的な側面をぱっと見て判断してしまうということですね(笑)

頼近 今日ここには半分ぐらい女性がいますが、私たちは何を考えなければいけないかということ、ぱっという第一印象を大事にしなければいけないということですか？

馬場 それは半分男のエゴかもしれませんが、僕があまり言いすぎるより、専門家として長谷川先生にうかがったほうがいいと思います。

長谷川 人間の配偶者選択が、男性側から女性側に、また女性側から男性側に何がめやすになっているかという研究は、たくさんあります。

37カ国以上にわたるそういう研究によると、トップに挙がってくるのはどこの国でも性格と相性です。性格がいいか、自分と相性がいいか。相性がいいというのは、趣味が似ている、好きなものが同じ、同じ信条を持っているということで、たとえば宗教の信条がまったく違う人はあまり魅力の対象にならない、政治的信条の違う人はあまり付き合っていけない、あるいは好きなスポーツや趣味が似ているほうがいいという意見はいつも出てきます。

また思いやりのあるやさしい人、自分のことを最後まで守ってくれるタイプの人がいいという性格に関する好みは、どの文化でも必ず上位

にあがります。

見かけはその次に必ずきますが、人間がどういう人を選ぶか、その全体像を捉えようとした場合、いちばん重要なのはやはり性格と相性の問題だという事は、狩猟採集民から文明国まで全部そう出てきます。

確かに男性が女性の見かけに惹かれるというのは、どこの文化でも出てきますね。それは、女性は繁殖可能な年数が少なく、18ぐらいから35歳ぐらいの間が出産の最適期ですよ。この短い繁殖期間にどれだけ繁殖力があるかは、非常に大事なアピールの視点なので、若さと繁殖可能性を強調するものを女性が出しているというのはそのとおりです。

原島 一般に男性は比較的衝動的というか見かけという短い期間の話をし、女性はどちらかというと、ぱっと見てもわからない長く付き合っってわかる性格について語るというのがありますよね。

僕も講演で、美人には3秒美人から30年美人までであるという話をします。つまり瞬間的にぱっと見ていいという3秒美人と、30年付き合っって、やっぱりおまえが良かったというのがあって、そのときに別にどっちがいいとは言わないけれども、だいたい聴いてる方が女性だと30年美人のほうがいい、男性は3秒美人もいいねと、一般的に出てきます。これはある程度仕方ないといえば仕方ないけれども、女性の場合には自分をしっかり最後まで守ってくれることが大切だというのは、やはりあるのかなと思います。

石黒 原島先生の話の中にも、職業に応じて顔が変わる、人間の内面は顔に出てくるというお話がありましたね。性格が大事だというのはわかりますが、やはり顔が反映していると男は思って、その3秒で全てを判断するのですか。

原島 いや、たぶんそうではないと思います。それは男の場合には、判断するというよりも、最初にそうあってほしいという期待を持つわけです。バックシャン、女性の後姿というのは、男性から見ればすべて美人ですよ。それはこうあってほしいという期待を先に持つということがあるのではないかと思いますね。

石黒 だから顔を通して性格をある種期待して、3秒で判断しているわけですか。

原島 しかしそれで裏切られることが多いというのが人生かな。

石黒 どれぐらい裏切られるのに時間がかかるかということですよ(笑)。

長谷川 顔の印象と、その人がどういう性格かを判定して、当たる

かという研究がいくつかあります。囚人のジレンマゲームというのがあって、こちらが裏切って相手を搾取したらこちらが得をする。でも向こうも裏切って自分が搾取されるかもしれない。一歩退いて協力して相手もそうなら両方ともうまくいくし、両方とも裏切れば何もないと、そういう囚人のジレンマ状況で写真を見せて、この人は協力的な人が搾取するような人かを判断して自分の手を決めるという実験をすると、かなり当たります。顔を一瞬見ただけで、その人が裏切るタイプの人か協力的な人が、それは確率以上に当たるという研究がいくつかあります。

原島 人間は瞬間的に相手がどういう人であるか判断しないと、場合によっては危ないということから、そういう直感があるということですかね。

顔に関して重要な点があって、うちで平均顔を取っていますけれども、あれで議論しているのはあくまで平均であって、忘れてはいけないのはバラツキがあるということです。平均としてそういう傾向があって、それはかなり優位にちゃんと出ることはあったとしても、やはりバラツキがありますから、プロレスラーの顔をしている銀行員も世の中にはいるわけです。それはいいとはいけないという話ではなく、そのバラツキを忘れて平均だけで議論すると、それはやはり社会的な差別に結びつくと思います。

長谷川 先ほどの写真を見て協力するかしないかを当てる話ですが、あれは写真を見ただけでもかなり当たりますが、さらに、見知らぬ人同士が5人で3分位しゃべって、そのあと個室に分かれて囚人のジレンマゲームをやると、たった3分話ただけで、相手が協力的か非協力的か、もっと当たるようになります。ですから顔を静止画で見ただけではなく、表情もしゃべることいろいろ含めて、人間は3分で相手をわかる確率が高いのではないかと考えます。

原島 人の顔というのは、やはりコミュニケーションだと思いますね。単に写真として、ものとして見るのではなくて、自分と相手との関係が生まれたところで何かいろいろなものを感じ取っていく。そのためにその3分というのは重要なのだと思います。

石黒 今の3分という話は、すごく私にとってはいい目標になりますね。要するに3分騙せるアンドロイドを作れば、かなり大きなハードルをクリアしたことになるわけですね。

頼近 原島先生の「いい顔になるための13ヵ条」の中で、これはオススメというのをいくつかご紹介されてはいかがでしょう？

原島 今から5年ぐらい前、日経新聞に連載したときに「いい顔になる顔訓13カ条」というのを載せました。中でも僕がいちばん大切だと思っているのが二つあって、一つは「自分の顔を好きになる」ということです。石黒先生、自分の顔をいろいろとおっしゃっているけれど、たぶん自分の顔が好きなのだと思います。好きでなければ自分と同じものを作ろうという気にならないと思うのです。

石黒 自分の顔は嫌いではありません。写真は怖いといつも言われますが、怖いのが自分ではかっこいいと思っていたりします。ただ、あまり気にもしていないですね。だから自分のコピーを作っても、自分は大して強い衝撃を受けるとは思っていなかったし、実際にそうでしたね。

原島 それから実は「顔訓13カ条」には載っていないもので、今日の会場からの質問の中に「金持ちになる顔はどんな顔ですか」とか、「幸せになる顔はどんな顔ですか」というおもしろいのがあって、ずっと考えていたのですが、金持ちになる顔というのは難しいですよ。幸せになる顔がわかっていたらみんなそういう顔をしますよね。確かに答えるのは難しいけれども、逆を考えて、金持ちにならない顔、幸せにならない顔はどういう顔かという質問のほうが、遥かに答えやすいと思います。

たとえば貧乏神が取り付いているような顔はやはりダメですよ。カネも儲からないし不幸せになる。その人と話していると、その人に貧乏神がついていて、それが自分に乗り移ってきそうな顔を、なんとなく思い浮かべてください。そうするとやはりそういう人とはだんだん離れていこう、付き合うのはやめよう、いっしょに仕事をするのはやめようという気になりますよね。

そうするとやはり運もついてこない。運というのは勝手に来るものではなくて、自分で呼び寄せるものだとするれば、やはりそういうときには運もついてこない、お金も儲からないということになる。

一方でこれは非常に難しいけれども、オーラのある顔、光っている顔というのが僕はあるような気がします。あの人は素晴らしい、あの人の周りだけ何か光り輝いている、そういう顔がやはりあると思います。そういう人のそばに寄っていくと、もしかしたらそのお裾分けをもらえるかもしれない。そういうオーラのある人といると自分も何かそういう気ちになる、元気になる。この人とできればいっしょに仕事をしたいという気持ちにさせる。そうすると運もついてくるというのがあります。

一般的に言うと、こういう顔をすればいい、こういうことをすれば必ずうまくいくというポジティブな方向を言うのは、非常に難しいです。一方ネガティブなことはかなり共通します。相手が嫌がることをやっている人はだいたいにおいてダメで、けっこう共通するものです。それに対



して相手が喜ぶことというのは、かなり相手によって変わります。その相手との関係を大切に、その人に対していろいろ気配りもあるだろうし、ケースバイケースで一般的には言えないのかなという気がしますよね。

長谷川　すごく現実的なことを言うと、笑うというのはとてもいいことです。

原島　相手も気持ちよくなる。

長谷川　笑うと、本当に免疫系の活性が高くなったり、脳内の伝達物質の活性化がいろいろ起こって、気分が良くなるだけではなくて体も強くなる。効果がある。それは免疫系の研究とリンクしていて、自己肯定的になって笑う、相手と一っしょに笑うということが、健康にたいへんよくてきれいになるということはありません。

ですから人生をポジティブに捉えて、何でも悪く考えず、にこにこ笑う、ハハハと笑うことがいいというのは、実際にも、科学的にもそうです。

それから何かを触るというのはすごくいい。自分で自分を触ってもいいし、互いに接触する、他人が触っても活性化されていていい。ですからお化粧するのはいろいろ触るから、本当に活性化が起こって免疫も高くなっていいみたいですよ。

原島　ご質問の中に「老化した顔の再活性策は?」というのがあって、まさに今の話につながっていると思うけれども、やはり笑うと体にいいのと同時に、印象としても若く見えますよね。一般的に老化というのはいくつかありますが、一つは若いときは顔が逆三角形に見えるけれども、年取ると重力に負けて、目尻が下がってハの字になり、だんだん顔が正三角形になる。若いときは肩が大きくて腰が引き締まった逆三角形の体がお腹が大きくなり重力に負けて正三角形になっていく。

笑って自然に逆三角形を顔につくると、若さの印象を与え、反対にむっとして口をハの字にすると顔が正三角形になります。実際にいろいろな実験があって、無表情の顔と笑っている顔を見せて、年齢印象を聞くと、だいたい笑っている顔のほうが若く見えるという結果が出ています。

石黒　ずっと笑っているとそれが笑っている状態ではなくなってしまうですね。どれぐらいの



頻度で笑うのがいいでしょう。

長谷川 会話の中でどのくらい笑うか、また一般に自分に降りかかるいろいろなことをどういうふうに思うかですよね。だから何でもストレスだ、イヤだ、きつと悪いことになるだろうという態度で暮らすか、それとも、ああいういいこともあると思って暮らすのでは、頻度が変わってくるでしょう。その程度の話です。

馬場 笑う頻度というよりも、その場の状況に適した反応をすると、相手といい会話やコミュニケーションができると思いますね。

最近気がつくのは、高校生ぐらいの女性で電車の中でやたらけたたましい声を挙げて笑う人がいます。こちらが聞いていておもしろくないことでも、普通われわれが相槌を打つように、相槌の代わりにケラケラ笑う女子高校生がたくさんいますね。この間も家内とミュージカルに行ったら、まったくおもしろくなくてもしょっちゅう笑う若い女性が後ろにいて邪魔なので、よっぽど「本当におもしろいときだけ笑え」と文句を言おうかと思ったぐらいです(笑)。

そこでどういう顔がいいかという今の質問も、部品が一つ一つどうのこうのというのはなかなか難しいと思います。それよりも、さっき私が申し上げた視線の問題で、相手とどれだけ eye-to-eye contact をして、「私はあなたのことを注目していますよ」と、相手に目でうまく伝えられると、相手は安心しますよね。

日本人はあまりそういうことをしませんよね。ヨーロッパ人は、自分の視線を覗き込んで話してくれる人が日本人にいないので寂しいと、よく言います。自分が信頼されていない気がするそうです。

相手が自分の子どもなら、親は遠慮なしに視線を覗き込んで、きちんとした人間関係ができます。でも私たちが目上の偉い人の顔をいきなり覗き込んで、「ん」とにらんだら、あいつ生意気だと、とんでもないことになりますね。そこはケースバイケースで、相手や状況に応じてうまく eye-to-eye contact をすれば、自分の顔や表情が相手に与える印象は、よくなると思います。

原島 それからも一つ、笑いといっても日本語では笑いでも、英語だと smile と laugh があります。これは基本的にかなり違う表情で、laugh は、ある意味では自分の気持ちがそのまま外に出て自分勝手に笑う。それに対して smile というのはかなり社会的な表情で、相手に対する気持ちとして smile する。基本的には smile というのは、相手に対して「降参したよ、もう攻撃しないよ」という意思表示ですから、そういう社会的な表情と自分勝手な表情というのは、相手に与える印象はずいぶん違うのかなとも思いますね。

あとは女性にとって、男性にとって、魅力的な顔だとは何かという

ご質問は非常に多かったけれども、かなり今までのところで答えが出ているようです。

もう一つ、西洋人と日本人、西洋と東洋の違いに関する質問があって、たとえば「西洋人から見ると東洋人は皆同じように見えるらしい。目が吊り上がっていてメガネをかけていて歯が出ていてといった、そのイメージはどうしてなのですか」という質問。それから「西洋人に比べて東洋人は本当に表情がないのですか」という質問がありますが、これはやはり人類学的なところで馬場先生、どうでしょう。

馬場 一つは、実際に違いがどれくらいわかるかです。つまり自分と同じ集団に属していて年中見ている人に関しては、詳しいことがよくわかるけれども、それ以外の人に対しては、単純に類型化して見ちゃうから違いがわからないという要素はありますよね。

原島 われわれから見れば女子高生はみんな同じに見えるけれども、女子高生から見ればわれわれはみんな同じということですよ。

馬場 そういった意味でヨーロッパ人から見ると、見慣れていないければ東洋人はみんな同じに見えるという要素がありますよね。

それ以外にも、なぜわれわれが同じに見られてしまうかということ、やはり顔の部品がヨーロッパ人に比べると小さいですね。目も鼻も唇もたいてい小さい。

ヨーロッパ人は口が前のほうに出っ張ってるというより、ほっぺたが引っ込んでいて、笑うと唇が後ろに引っ張られます。ですから横から見ると、ヨーロッパ人が笑うと歯がみんな見えます。私たちはいくら笑っても唇が横に開くだけで、横から見ても前歯しか見えません。

それからウィンクができるかできないかという意味で、表情筋を支配する神経が違うと思います。ですからたとえば表情筋を左右を別々に動かすことができるかどうかで、表情が豊かになるかどうか違いますね。

そういう顔の構造的な違いや神経支配の違いから、ヨーロッパ人は表情が豊かで大袈裟になることは当然あると思います。

原島 確かに日本人は表情が小さいと思いますが、その分表情を読み取る能力が高いのではないのでしょうか。決して日本人は表情のコミュニケーションが少ないのではなくて、表出するのが小さい割に、読み取る能力が高いから、むしろ豊かな表情やコミュニケーションをしているのではないかなと思いますね。能面はほんの少しの違いで表情が変わるというのを、われわれは見ていますよね。

馬場 それは大いにあると思います。

長谷川 私も西洋か東洋、日本かといったら、基本的にはまず見慣れているものはよく区別がつくけれど、見慣れていないものは区別

がつかないのが一つと、それから造作が小さいという、それはその通りだと思います。

また、私がヨーロッパやアメリカでずっと暮らしているときの自分の表情と、日本にいたときの表情は違います。日本人同士で日本語を話しているときと、欧米人相手に英語で話すときとは、自分の何かスイッチが変わりますね。そのときの自分の表情はもっと大袈裟になっているし、はっきり何かを出しています。それは文化的にそういうスイッチが自分の中に無意識にあって、きっと違うのだと思います。

原島 確かにそうですね。たとえばアメリカの2世の方は、DNAや顔の造りは普通の日本人と同じでも、やはり表情が豊かで、ずいぶん違います。ということは、かなりの部分が文化や環境などに依存するのであって、人類学的にこうだから仕方がないと思わないほうが、むしろいいのかなという気もします。

頼近 石黒先生がお作りになったアンドロイドは、日本語と英語の2つ言語をしゃべるようになさいましたよね。英語のときと日本語のときと、表情は大きく変わりましたか？

石黒 それは英語のほうが単純な口の動きで済み、日本語のほうが口の形を重要視しないと自然に見えないということなので、また別の問題かなと思います。

アンドロイドを作るとき、日本人相手の場合は、西洋人相手のときと違って、目の動かし方にかなり神経を使います。これはちゃんと試したり評価したわけではありませんが、日本人は表情が乏しい代わりに目で意思疎通することがすごく多い。あのアンドロイドはさほど表情豊かではありませんが、日本人のほうが、目の動きからいろいろな感情を読みますね。

アンドロイドをどうやって自然に動かそうかというときに、感情のモデルを入れようと思って、ある人に座ってもらい、その人がどういう感情の変化を持っているように見えるかという実験を行いました。日本人はたとえば目の動きで敏感に感情を読みますが、欧米人はそういうことが少ない気が少ししていますけれど、それは他の先生方に聞きたいところです。

長谷川 そのへんの違いが本当にどこまであるのか、研究論文はあるでしょうが、私はよく知りません。

むしろ私の知っているのは、他人の表情や顔の中からどれだけ感情を読み取るかには、明らかに男女差があって、男性のほうができにくく、女性のほうができる。人間はみんな読み取れますけれども、その度合いが男性のほうがヘタだというのは、万国共通に出ます。女性のほうが、相手が男性であれ女性であれ、微妙な表情の変化からその人

の感情状態の推定が上手です。

石黒 逆に男性の顔と女性の顔、どちらが読み取りやすいというのがありますか。

原島 男性が男性の顔を読む、女性が女性の顔を読むというのは？

長谷川 それをやりたかったのですが、今回実験が間に合いませんでした。

原島 今の話、結論付けると、男性は読まれるから気をつけなければいけないということですよ。

馬場 下世話に言うと、男の浮気はばれる、女性はばれない。よく言う話ですよ。

原島 そう結論付けていいですか？

頼近 最後に、原島先生、顔学を追求していらしてその素晴らしさを簡単に一言言っていただいて、今日のお開きとさせていただきたいのですが、いかがでしょうか。

原島 顔学の素晴らしさと、顔学をやっていて得をしたということとあると思いますが、得をしたという意味では、顔の話は誰もが関心がありますよね。万国共通語、男性女性関係ない。ということは、全然知らない人と仲良くなるには、顔の話はけっこういいテーマである。それで相手との関係ができて仲良くなれば、他の話もしやすくなっていく。人間関係をつくる上で、非常におもしろいテーマだなと思います。

一方気をつけなければいけないのは、顔の話は相手を傷つけることにもなる。それだけ厳しいものだと認識しながら、でもやはり顔というのは人間関係の中で重要なテーマだというのが、僕の顔に対する考え方です。

頼近 原島先生、馬場先生、長谷川先生、石黒先生、それから会場にお越しくくださった皆様方、今日は長時間ありがとうございました。